

189 裏切られ逮捕されるイエス

ヨハネによる福音書 18 : 1~12、マタイ 26 : 47~56、マルコ 14 : 43~50、ルカ 22 : 47~53

01 こう (→ファイル No.188・・・立て、行こう。見よ、わたしを裏切る者が来た) 話し終えると、イエスは弟子たちと一緒に、キドロンの谷の向こうへ出て行かれた。そこには(ゲツセマネと呼ばれるオリーブ)園があり、イエスは弟子たちとその中に入られた。

02 イエスを裏切ろうとしていた(イスカリオテの)ユダも、その場所を知っていた。イエスは、弟子たちと共に度々ここに集まっておられたからである。

→ユダは、銀貨三十枚(→当時の奴隷の値段)でイエスを裏切った(マタイ 26 : 15、27 : 3、9)。

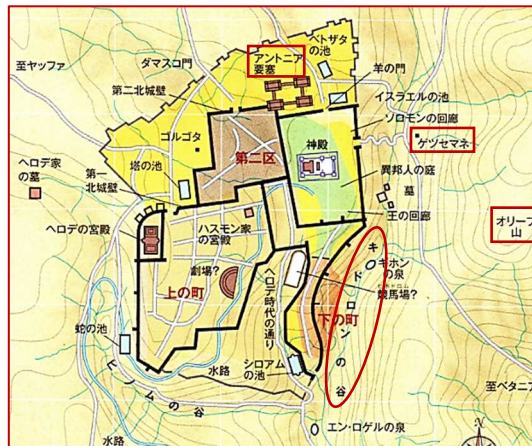
→出エジプト記 23 : 8

あなたは賄賂を取ってはならない。賄賂は、目のあいている者の目を見えなくし、正しい人の言い分をゆがめるからである。

→祭司長やファリサイ派たちがユダを利用した理由

①イエスの行動(習慣)を知る案内役→民の目に入らない場所で、イエスを逮捕する必要があった。

②ローマ法廷等の場等での証人(偽証)役



03 それで①ユダは、(ローマ軍の)②一隊の兵士と、祭司長たちやファリサイ派の人々の遣わした③下役たち(→神殿の治安を守る警護官)を引き連れて、そこにやって来た。松明 torches やともし火 lanterns や武器を手にしていた。

→NIV : So ①Judas came to the garden, guiding ②a detachment of soldiers and ③some officials from the chief priests and the Pharisees. They were carrying torches, lanterns and weapons.

→NKJV : Then ①Judas, having received ②a detachment of troops, and ③officers from the chief priests and Pharisees, came there with lanterns, torches, and weapons.

→リビング・バイブル : 祭司長とパリサイ人たちは、①ユダに、②一隊の兵士と③神殿警備の役人たちをつけて園に差し向けました。手に手にあかあかと燃えるたいまつやランプをかざし、武器を持った一隊が、オリーブ園に押しかけました。

→ローマ兵は、神殿付近のアントニア要塞に配置され、エルサレムの治安を任されていた。祭司長とファリサイ派は、ローマ兵にイエスが危険な反逆者だと説き、逮捕させようとした。祭司長たちは神殿の職務を任された人々、ファリサイ派は、律法の中でも、特に安息日や断食、施しを行うこと、宗教的な清めを強調した。律法学者の多くがこのファリサイ派に属した。

04 イエスは御自分の身に起こることを何もかも知っておられ、(自ら)進み出て、「**だれを捜しているのか**」と言われた。

05 彼らが(イエスが創造主であり、救い主であることを知らないで)「**ナザレのイエスだ**」と答えると、イエスは「**わたしである**」(→イエスの神性宣言)と言われた。イエスを裏切ろうとしていたユダも彼らと一緒にいた。

→わたしである : 直訳は「わたしはある」。七十人訳ギリシア語聖書に由来し、神名と見なされることもある(出エジプト 3 : 14)。

06 イエスが「わたしである」と言われたとき、彼らは(イエスの神性に触れ、畏れのあまり)後ずさりして、地に倒れた。

07 そこで、イエスが「**だれを捜しているのか**」と重ねてお尋ねになると、彼らは「**ナザレのイエスだ**」と言った。

08 すると、イエスは言われた。「(それは)『**わたしである**』と言ったではないか。**わたしを捜しているのなら、この人々** (→弟子たち) **は去らせなさい。**」

09 それは、「**あなたが与えてくださった人を、わたしは一人も失いませんでした**」と言われたイエスの言葉 (→ヨハネ 17 : 12) が実現するためであった。

→ヨハネによる福音書 17 : 12

わたしは彼らと一緒にいる間、あなたが与えてくださった御名によって彼らを守りました。わたしが保護したので、滅びの子のほかは、だれも滅びませんでした。聖書が実現するためです。

ルカによる福音書 22 : 47~48

イエスがまだ話しておられると、群衆が現れ、十二人の一人でユダという者が先頭に立って、イエスに接吻をしようと近づいた。イエスは、「**ユダ、あなたは接吻で人の子を裏切るのか**」と言われた。

10 シモン・ペトロは (護身用として) 剣を持っていたので、(イエスを救おうと考え、) それを抜いて大祭司の手下に打ってかかり、その右の耳を切り落とした。(この大祭司の) 手下の名はマルコスであった。

→ルカによる福音書 22 : 50~51

そのうちのある者が大祭司の手下に打ちかかって、その右の耳を切り落とした。そこでイエスは、「やめなさい。もうそれでよい」と言い、その耳に触れていやされた (→ルカの医者らしい記述)。

→マルコス (→聖書にはここにしか登場しない) という名は「王」を意味し、大祭司カイアファに仕えていたとされる。

→ルカによる福音書 22 : 38

そこで彼らが、「主よ、剣なら、このとおりにここに二振りあります」と言うと、イエスは、「それでよい」と言われた。



11 イエスはペトロに言われた。「**剣をさやに納めなさい。父がお与えになった杯は、飲むべきではないか。**」

→マタイによる福音書 26 : 52~53

そこで、イエスは言われた。「剣をさやに納めなさい。剣を取る者は皆、剣で滅びる。わたしが父にお願いできないとでも思うのか。お願いすれば、父は十二軍団以上の天使を今すぐ送ってくださるであろう。

→「杯を飲み干す」とは苦しむこと。神の御意思を行うのは、「苦しみ」の象徴である杯を飲み干すようなものであると表現している (イザヤ書 51 : 17、22、エレミヤ書 25 : 15、17)。

→イエスは霊的な戦い (信仰を守る戦い) のために、武器を用いることを否定しているのであって、自衛を否定しているのではない。これは、イエスが天の軍勢に応援を要請しなかったことから分かる。

12 そこで一隊の兵士と (ローマ軍の司令官である) 千人隊長、およびユダヤ人の下役たちは、イエスを捕らえて縛り、(13 まず、アンナスのところへ連れて行った。彼が、その年の大祭司カイアファのしゅうとだったからである。)

→マルコによる福音書 14 : 50

弟子たちは皆、イエスを見捨てて逃げてしまった。一人の若者が、素肌に亜麻布をまとってイエスについて来ていた。人々が捕らえようとする、亜麻布を捨てて裸で逃げてしまった。

【参考】カイアフア Kayafa

ユダヤの大祭司（在位：AD18年頃～44年頃）で、カイアフアは父の名で、正確には「カイアフアの子ヨセフ」である。サドカイ派で、イエスを引見する場面等で登場する（イエス殺害計画の首謀者）。大祭司であるカイアフアは地域の諸問題に関する決定権や祭司たちの統括権を持ち、ユダヤ最高法院の議長でもあり、イスラエルの宗教、政治の指導者たちの間で、絶大な力を持っていた。そして、イエスを死刑にするための裁判も指揮した。裁判の後、イエスはローマ帝国ユダヤ総督ポンティオ・ピラトに引き渡した（マタイ 27：2、マルコ 15：1、ルカ 23：1）。

タイトル(書名)	章:節 聖句 [検索対象総数：10 / 聖句等の総数 33250 (カイアフア)10個]	聖書Navi Active 393128091 (新共同訳) [検索語彙：カイアフア]
S マタイによる福音書	26:3 そのころ、祭司長たちや民の長老たちは、カイアフアという大祭司の屋敷に集まり、	
S マタイによる福音書	26:57 人々はイエスを捕らえると、大祭司カイアフアのところに連れて行った。そこには、律法学者たちや長老たちが集まっていた。	
S ルカによる福音書	3:2 アンナスとカイアフアとが大祭司であったとき、神の言葉が荒れ野でザカリアの子ヨハネに降った。	
S ヨハネによる福音書	11:49 彼らの中の一人で、その年の大祭司であったカイアフアが言った。「あなたがたは何も分かっていない。	
S ヨハネによる福音書	11:51 これは、カイアフアが自分の考えから話したのではない。その年の大祭司であったので預言して、イエスが国民のために死ぬ、と言ったのである。	
S ヨハネによる福音書	18:13 まず、アンナスのところへ連れて行った。彼が、その年の大祭司カイアフアのしゅうとだったからである。	
S ヨハネによる福音書	18:14 一人の人間が民の代わりに死ぬ方が好都合だと、ユダヤ人たちに助言したのは、このカイアフアであった。	
S ヨハネによる福音書	18:24 アンナスは、イエスを縛ったまま、大祭司カイアフアのもとに送った。	
S ヨハネによる福音書	18:28 人々は、イエスをカイアフアのところから総督官邸に連れて行った。明け方であった。しかし、彼らは自分では官邸に入らなかった。汚れないで過越の食事をするためである。	
S 使徒言行録	4:6 大祭司アンナスとカイアフアとヨハネとアレクサンドロと大祭司一族が集まった。	

ユダヤ人の歴史家のフラウィウス・ヨセフス※1によると、カイアフアはAD18年頃に大祭司となった。大祭司アンナス（在位：AD6～15年）の義理の息子（婿）で、ローマ総督の任命によって大祭司となった。これは当時のユダヤではハスモン朝※2以来の伝統で大祭司が王と同じように政治的な影響力をもっていたことを示している。

イエスを捕らえた人々は、カイアフアより先にアンナスのもとへイエスを連れて行った（ヨハネ 18:13）ことから、アンナスが辞職後も大祭司としての称号を持ち、重要問題では助言を求められるなど、元大祭司として強い影響力を持っていたと考えられる。



カイアフアの前に立つキリスト/Mattias Stom 筆

※1：ヨセフス・ベン・マタティア（AD37年～100年頃）、帝政ローマ期の政治家及び著述家。AD66年に勃発したユダヤ戦争で当初ユダヤ軍の指揮官として戦ったがローマ軍に投降し、ティトウスの幕僚としてエルサレム陥落にいたる一部始終を目撃、後にこの顛末を記した『ユダヤ戦記』を著した。
 ※2：BC140年頃からBC37年までユダヤ（イスラエル）の独立を維持して統治したユダヤ人王朝。BC166年に起きたユダ・マカバイ（マカベウス）によるセレウコス朝軍への決起から20年後に成立。フラウィウス・ヨセフスによればハスモンという名は一族の先祖、祭司マタティアの祖父の名前に由来しているといわれている。